様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究(A)
研究期間：2012～2017
課題番号：２４６８１０５０

研究課題名（和文）中国農村のお喋りとその伝播から記憶を再考する

研究課題名（英文）Rethinking memory from spread of chattering in rural villalge of China

研究代表者
石井　弓（Ishii, Yumi）

東京大学・東洋文化研究所・特別研究員

研究者番号：５０４６６８１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　5,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は中国農村でのオーラルヒストリー調査によって、「順口溜」(シュンコウリュウ)という覚え歌に残された普通の人々の意識を読み取り、共有された記憶について考えてきた。具体的には１）日中戦争対日協力者の記憶を論じ、また順口溜の流布する範囲が雨乞いを共同で行う地域と合致することから、２）雨乞いのコミュニティを見出した。雨乞いは起源神話である『趙氏孤児』を支柱として社会混乱や政治的迫害を乗り越えてきたことから３）『趙氏孤児』の物語が織りなす中国人の精神性と、物語のヨーロッパへの伝播についても調査を行った。これらは中国のコミュニティ論や中国とヨーロッパとの歴史的な繋がりを論じる新な視覚をもたらした。

研究成果の概要（英文）：In this survey, I investigated collective memory in rural villages of Shanxi China by oral history interviews, collecting short mnemonic rhythms spread mouth to mouth called Shunkouliu, in which I found reflections of common memories of Chinese ordinary people. As results: I wrote a paper about “Memory of Chinese Collaborators in The Anti-Japanese war". I also found communities of rain-making ritual and memory sharing where a same Shunkouliu is sung. Their rain-making ritual has its origin myth "Orphan of Zhao", which is well known in Shanxi province. I researched many types of "Orphan of Zhao" inherrited in each village and compared them with scripts of Jin and Jing opera and Story spreaded to UK and France in 18th century. These findings brings a new view point to think about community and historical connection between China and Europe.

研究分野：中国地域研究、オーラルヒストリー

キーワード：オーラルヒストリー　中国史　地域研究　集合的記憶　雨乞い　コミュニティ　山西省　グローバルヒストリー

１．研究開始当初の背景

申請者は 21 年度科研費（若手 B）採用課題「中国人の戦争記憶―被害実態と記憶の形成過程―」にて、山西省盂県農村における戦争記憶の形成及び継承過程を研究してきた。その中で、村人たちが世代を超えて戦争の共通の夢を見るなど、記憶が強く共有される現象を確認した。中華人民共和国建国以降、政治運動や宣伝活動で戦争勝利が喧伝されたのに反して、農村で共有されたのは日本軍から必死で逃げる記憶であり、それは口頭で伝えられた戦争体験であった。これまでの研究は、日中戦争の記憶を中心に論じてきたが、その中から戦争記憶を超えた農村世界全体に関わる「記憶空間」を掘り起こす可能性を見出したため、本研究テーマを設定した。具体的には以下の側面から考察する。

識字率の低い農村では、記憶共有は主に口頭で交わされるお喋りに頼っている。申請者は、このお喋りの実態を把握するため、「順口溜（シュンコウリュウ）」に着目した。「順口溜」は短い覚え歌のようなものであるが、戦争記憶に止まらず、日常における多様な出来事を伝える村内部の口頭伝達媒体であり、農民の素朴な感情を直接的に歌い込んでいる。古いものは 100 年以上も歌い継がれることから、村人たちが長い間変わらず記憶に留めようとする出来事であることが分かる。歌は、歌い手の感情を吐露する目的で歌われ、それに共鳴した聞き手が自らの内部に取り込み、そして自分の感情として歌うという共感の連鎖によって村中に広まる。ここに、記憶共有の契機を見出していく。

また、調査地域では交通の不便な山中の村にも廟と「戯台」（舞台）が残り、かつて雨乞いの活動や地方劇を盛んに行っていたことが窺われる。雨乞いは、最も山奥にある村を中心として多数の村が共同で行っており、その地域は「順口溜」の共有範囲（お喋りのコミュニティ）と重なることが調査により明らかとなった。ここから雨乞いは、記憶共有の場として機能していた可能性が高い。ただし、雨乞いは文化大革命によって禁止され、80 年代以降に一部が復活したことから「順口溜」は、雨乞いが停止していた期間も絶え間なく、文革以前のコミュニティを基盤として共有されてきたと言える。ここから記憶媒体（順口溜）とその共有の場（雨乞い）の関係は如何なるものかを問い直す。

本研究の「記憶」に関する理解と問題設定はこれまでの記憶研究の蓄積の上に立つものである。M・アルヴァックスの先駆的研究『集合的記憶』（フランス語版、1960 年）は、「記憶はある一定の集団の中で文化的、社会的に構築されるもの」であると提示し、体験が個人や世代を超えて記憶される可能性を示唆した。本研究もこの発想を基礎としているが、これまでの記憶研究は記念式典や象徴的モニュメントを表象論的手法によって分析するもので、出来事が人々に如何に浸透したかは問われることがなかった。代表的な例は 80 年代における国民国家言説の再考（B・アンダーソン『想像の共同体』、E・ホブズボウム『創られた伝統』など）である。これらの研究では「記憶」の構築性に依拠して、国民国家という抽象的なつながりを論じているが、実際に人々がそのような記憶を内面化させたのか、どのような具体的な集団で共有されたのかといった問題は論じられることがなかった。本研究は、中国山西省という具体的な場において、一人ひとりの視点から記憶を問うことで、これまでの記憶研究とは異なる方向から記憶を捉えなおす。

２．研究の目的

本研究は、「中国農村のお喋りとその伝播」から「記憶」とは何かを再考するものである。申請者はこれまで中国山西省をフィールドとして中国農村における戦争記憶の調査を実施してきた。その中で、戦争が戦後生まれの村人によってあたかも体験したかのように語られる現象を多数確認してきた。都市における記憶の共有は、記念式典やモニュメントなど、これまで表象論的に論じられてきたが、識字率が低い山中の農村では、口頭によるお喋りが人々の記憶をつなぐ役割をしてきたことから、本研究ではお喋りという原始的かつ根本的な行為が、体験を超えた記憶を如何に可能とするのか、中国農村の文化や習慣（「順口溜」、雨乞い、晋劇）を踏まえつつ考察する。研究手法としてオーラル・ヒストリーを用い、記憶の共有を一人ひとりの内面から考察し、「集合的記憶」（M・アルヴァックス）を個別の記憶の総体として捉えなおす。

３．研究の方法

本研究では、<u>①順口溜を記憶共有の媒体</u>、そして<u>②雨乞い、地方劇、そして村を、記憶が受け渡される場</u>であると仮定し、記憶と場の関係性を考察することを通して農村での記憶の意味や役割を明らかにしていく。その際何の記憶を扱うかは限定せず、聞き取りの中から浮かび上がってくる、彼らにとっての「重要な過去」を取り上げる。研究手法は主に山西省盂県農村部におけるフィールド・ワークであり、文献資料も併せて用いる。申請者は 2006 年度国際交流基金アジア次世代フェローシップを得て 4 か月間現地での集中的な聞き取り調査を行い、2008 年～2010 年には文科省科学研究費補助金（若手 B）を得て継続的な現地調査を行ってきた。延べ 198 名からの聞き取り調査をもとに抽出した次のテーマについて、農村を再訪し、更に内容を絞った調査を行う。

①順口溜を通した記憶の考察：「順口溜」は現実世界の出来事を感情を込めて歌うもの

で、それに共鳴した者が次の歌い手になる。他者の記憶に共鳴し自己の内部に取り込み、そして自らの歌（記憶）として歌う過程は、出来事の記憶の個人化・内面化の契機であり、その総体が「集合的記憶」となる。「順口溜」の内容から、村人にとって、その出来事の何が悲しく、何に興味を持ち、何を伝えたいのかを読み取る。歌の内容は、戦争、土地改革、雨乞い、政治批判や嫁入りの切なさなど様々であるが、時に裏の意味として卑猥な内容を隠し歌うこともあり、喜怒哀楽の感情からユーモアの感覚を含めて、広い範囲で収集し、農民の世界観を知る手段としても用いる。戦争記憶のみならず、共和国以降の多様な出来事について、農民たちが如何に感じ、記憶してきたのかを「順口溜」から明らかにする。

②雨乞いを通してお喋りのコミュニティの性質を考察する：「順口溜」の共有範囲は雨乞いを共同で行う地域と重なっており、これを記憶の受け渡される「場」と捉える。ここから、次に点に注意しつつ雨乞いの如何なる要因が記憶の共有を担保しているのかを導き出す。第一に、農作業の力を失った老人が、雨乞いの主役となることである。老人と若者の間に構築される日常とは異なる関係性とその時に受け渡される過去の語りに注目する。第二に、調査地域の雨乞いは、地方劇に歌われる「趙氏孤児」の物語（趙家のお家騒動）を拠り所にして成り立っている。「趙氏孤児」が逃走中、上幞頭村に立ち寄った際に大雨が降ったことから、趙氏孤児を祭る「大王廟」を雨の神としたと言われている。旱魃になると地域の各村が神を借りに来て（借大王）自村まで持ち帰り、数日間飲まず食わずで命をかけて祈り続ける。この「借大王」による地域のつながりに着目する。第三に、雨が降ると村では廟と対面式に建てられた戯台で地方劇を演じて神に「還願」（恩返し）を行った。村人は日照りと疲労から一気に解放され、観劇を楽んだと言われる。このような共同活動と、「苦」から「悦」への極端な感情の動きが、記憶を共有する場の形成とどう関わるのかを考える。

③地方劇と順口溜のつながり：順口溜は、様々な地方劇の劇中歌から歌詞を借りて作られる。劇中の物語が順口溜を通して現実世界とどう結びついているのかを読み取る。また、大王廟に祭られる趙氏孤児は、最も古い地方劇の演目でもある。これが劇中で如何に演じられ、観客にどう受け止められているかを考察することで、村世界の雨乞いに対する見方を読み取る。

④雨乞いの復活した地域としなかった地域：調査地域では、80 年代に雨乞いが復活した地域としなかった地域が存在する。両地域を比較することで、記憶共有の場としての雨乞いの役割を明らかにする。

４．研究成果

本研究は順口溜という覚え歌に残された中国農村の普通の人々の意識を読み取ることによって、次の3つの成果に到達した。１）日中戦争対日協力者の記憶、２）雨乞いコミュニティの発見、３）『趙氏孤児』の物語が織りなす精神世界と物語のヨーロッパへの伝播である。

１）日中戦争対日協力者の記憶

対日協力者たちは人民共和国の政策によって批判され多くが処刑された。家族や関係者たちもその影響を免れていない。多くの対日協力があったにも拘わらず、その実態を聞き取ることは非常に困難である。しかしながら口頭で伝えられる「順口溜」には対日協力者たちについての農民たちの素朴な感情が歌いこまれていた。それをもとに、農村での実態調査を行ったことから、人民共和国の公的な表現（漢奸としての批判、悪役、憎悪）としてしか表現されなかったこれまでの認識を覆す農民たちの複雑な記憶や感情を聞き取ることができた。成果は論文に発表するとともに、そこから、「順口溜」という媒体も最も虐げられた農民たちには共有されず、村内の権力関係の中で流布していることが分かった。具体的な成果は論文「日中戦争における対日協力者の記憶」『思想』（No.1096. 2015年8月）に発表した。

２）雨乞いコミュニティの発見

本研究課題の設定時には、水嶺底～羊泉村に通じる水無川に沿った7つの村の雨乞いコミュニティを前提としていた。調査によってそれは盂県中部の藏山を中心とした盂県全域に及ぶ雨乞いコミュニティの一部であることが分かった。また、藏山以外にも、小藏山と呼ばれる南社と上卜頭にもその村を中心とした小規模だが同様のコミュニティがあることが明らかになった。それらのコミュニティは雨乞いの神である大王の小さな像を貸借することによって成り立っており、この大王像の往来を追跡することで、目に見える形で村人たちの精神的なつながりを理解することができた。それは数十キロも離れた盂県外の村にも「神親」（神の親戚）として飛び火しており、大王像は文化大革命の間にその広範な地域の中で移動しつつ隠され、保護されていた。中国のコミュニティはこれまで、定期市や宗族によって論じられてきたが、雨乞いの活動や神への信仰を通じたこのようなつながりもまた、ひとつのコミュニティとして論じられる可能性を見出した。

３）『趙氏孤児』の物語が構成するコミュニティと物語のヨーロッパへの伝播

大王像の貸借や災難を回避して山中に隠される「移動」は、様々な物語と結びついてき

た。そのひとつが『趙氏孤児』（雨乞いの起源神話でもある）である。聞き取り調査によって、この隠匿と復活のプロットはまた、村における様々な出来事の語りの中にも組み込まれていることが分かった。『趙氏孤児』は単なる物語ではなく、中国農村に住む人々の思考の枠組みを表現する媒体であり、だからこそ、古くから今日に至るまで語り継がれてきたといえる。雨乞いの活動が幾多の戦乱や政策的禁止に直面しながらも復活し続けてきたのは、『趙氏孤児』の物語とつながり、村人たちの精神性を体現してきたためであると分かってきた。村内での聞き取りでは、『趙氏孤児』が各村で少しずつ変化しながら村の歴史とつながる形で語り継がれていた。この物語は一方で、京劇や晋劇の台本の中に残され、北京国家図書館では元代以降の『趙氏孤児』台本を収集することができた。また、18世紀にキリスト教の宣教師によってフランス、イギリスに伝えられ、ヴォルテールの翻案によって1755年にパリで上演されていた。本研究はこの物語の多層性を見出し、口頭での語りからヨーロッパへの伝播に至るまでの繋がりや変化の中に、中国（農村）の精神性とヨーロッパの繋がり/隔たりを読み取る可能性を見出した。それは「近代」を単なるウエスタンインパクトではない形で捉えなおす新たな分析視覚となると考えられる。

本研究ではこうした具体的な実態調査と合わせて国際的な場での研究発表や論文発表を行ってきた。2013年にはInternational Oral history Association（Buenos Aires, Argentine）、2014年にはOral History Association（Oklahoma, USA）に参加し、本研究を歴史学の中でいかに位置付けるべきかについて考察し、国際的な立脚点を探った。その延長線上に、国際共同研究強化の科研費を得て2018年3月よりイギリスオックスフォード大学での研究を開始している。

なお、以上の研究期間中2度の妊娠と出産、また中国での反日デモがあったことから、調査・研究が著しく制限された。本来であればこれ以上の研究の発展が見込まれたのであるが、それについては今後展開していきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① Ishii, Yumi, “The Transmission of Wartime Memories: Films, Stories, and Dreams in Rural Villages of Shanxi, China,” *Oral History Forum d’histoire orale* 37 (2017), Special Issue on Generations and Memory: Continuity and Change, with peer review, pp.1-34.

② 石井弓、記憶と歴史の交錯――日中戦争のある「惨案」の事例から」、現代中国研究、査読有、37 号、2016 年、pp.35-53

③ 石井弓、中国農村における戦争記憶と媒体――映画、語り、夢、東北アジア歴史研究フォーラム「媒体と公共記憶の中の戦争」論文集、査読有、2015 年 11 月 pp.151-176

④ 石井弓、日中戦争における対日協力者の記憶、思想、No.1096. 2015 年 8 月 pp.67-91

⑤ 石井弓、民间的口传如何表现抗战记忆〉《“创伤记忆与文化表征――文学如何书写历史”国际学术会议论文集》2013 年 5 月 pp.312-318

⑥ 石井弓、「山西省農村における雨乞い―農民の視点から「迷信」を捉える」『中国研究月報』、査読有、Vol.66, No.6. 2012 年 6 月 pp.1-19

〔学会発表〕（計６件）

① 国際学会（招聘）：石井弓、中国農村の戦争記憶と媒体――映画、語り、夢、東アジア歴史研究フォーラム「媒体と公共記憶の中の戦争」、2015 年 11 月 6－7 日、韓国漢陽大学

② 国際学会： Yumi Ishii, Collective memory of the Second Sino-Japanese War among Villagers in Shanxi, China: dreams, films and narratives, The 48th meeting of Oral History Association in Madison Wisconsin, USA, October 8-12, 2014.

③ 国際学会：石井弓、民间的口传如何表现抗战记忆、国际学术会议“创伤记忆与文化表征――文学如何书写历史”（2013 年 5 月 27-28 日，北京）

④ 石井弓、オーラルヒストリーによって記憶を考える、学問を考える会、2016 年 7 月 6 日、東京大学東洋文化研究所

⑤ 石井弓、中国における社会主義時代の集団化と戦争記憶、戦争と社会主義のメモリースケープ研究会 2016 年 6 月 18 日、愛知教育大学

⑥ 石井弓、山西省農村における雨乞い―農民の視点から「迷信」を捉える、発表及びコメンテーター、当代文学研究会 2012 年 7 月例会、2012 年 7 月 21 日、駒沢大学

〔図書〕（計２件）

① 石井弓 他、中国華北村落のレジリエンス――雨乞い復活を通して考える、『歴史としてのレジリエンス』京都大学出版社、2016、pp.97-127

② 石井弓、記憶としての日中戦争――インタビューによる他者理解の可能性、研文出版、2013、278

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
（１）研究代表者

石井　弓（Ishii, Yumi）
東京大学・東洋文化研究所・特別研究員
研究者番号：50466819

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）